



DREADFUL IN TRUTH

本当は恐ろしい
グリム童話

Kiryu Misao

桐生 操

DREADFUL IN TRUTH

本当は恐ろしい
グリム童話

江苏工业学院图书馆

Kirara
桐生 操

藏书章

Kiryu Misao
桐生 操

女性二人の共同ペンネーム。

共にパリ大学（ソルボンヌ大学）、リヨン大学に留学、
主にフランス文学や歴史を専攻する。

帰国後、共同執筆を開始。

以来、ルネサンス期を中心とした西洋史人物の評伝をはじめ、
歴史の知られざるエピソードを次々と発表し、好評を得ている。
著書には『世界史悪女のミステリー』『ヨーロッパ歴史と謎の名所物語』
『ハプスブルク家の悲劇』（当社刊）の他、
『王妃カトリーヌ・ド・メディチ』『イギリス・怖くて不思議な話』
『美しき拷問の本』など、多数ある。

本当は恐ろしい グリム童話



1998年7月5日【初版第1刷発行】

1998年12月12日【初版第22刷発行】

著者——桐生 操 ©Misao Kiryu, Printed in Japan, 1998

発行者——栗原幹夫

発行所——KKベストセラーズ

東京都新宿区西新宿7-22-27 〒160-8305

電話 03-3364-9121 振替 00180-6-103083

印刷所 錦明印刷株式会社

製本所 株式会社積信堂

DTP製作 Fs factory

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本がございましたらお取り替えいたします。

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製複写（コピー）することは、
法律で認められた場合を除き、著作権及び出版権の侵害になりますので、
その場合はあらかじめ小社あてに許諾を求めて下さい。

ISBN4-584-18345-7 C0090

残酷にして深遠なる童話の世界へようこそはじめに

グリム兄弟であるヤーコプ（一七八五～一八六三）とヴィルヘルム（一七八六～一八五九）は、行政司法官の子として、ドイツのハーナウという街に生まれた。一七九六年に父が病死すると一家は貧乏の底につき落とされたが、兄弟は苦学しながら名門マールブルク大学を優秀な成績で卒業。その後はゲッティンゲン、ベルリンなどの大学教授職の傍ら、『ドイツ伝説集』『ドイツ文法』『ドイツ法律古事誌』などを次々と出版する。

このグリム兄弟によって、『グリム童話』が最初に発刊されたのは一八一二年クリスマス。その六年前の一八〇六年には、ドイツ全体がナポレオン軍に占領されるという悲劇が起こっている。

彼らの情熱的な創作欲の源になったのは、失われたユートピアへの熱い思いだった。すな

わちドイツ民族の統一である。グリム兄弟はナポレオン軍による占領というような事態になったのはドイツが群小国家に分裂しているせいだと考え、ドイツ民族を統一するのは言語文化だと確信するようになった。

十八世紀後半、十九世紀は、文学ではゲーテ、シラー、哲学ではカント、音楽ではモーツアルト、ベートーベン、ハイドンなど、ドイツ文化の絶頂期だった。過激な民族意識・愛国心の高揚をめざすドイツ・ロマン主義が興り、ゲルマン民族の歴史、神話、伝説、民話などに対する関心が高まった。グリム童話集もそんな時代背景から生まれたのである。

一八一二年に発刊された第一巻の売れ行きは順調で、その後、第二版（一八一九年）、第三版（一八三七）、第四版（一八四〇年）、第五版（一八四三年）、第六版（一八五〇年）と出版され、第七版（一八五七年）がグリム生前最後の版となった。これまでの日本語の翻訳は、大抵がこの第七版に基づいている。

しかし一方でこの童話集は、「母親がこれらの物語を無垢な娘に顔を赤らめずに話してやれようか」などと、同業者や批評家たちから批判された。それがこたえたらしく、その後、グリム兄弟は版を重ねるたびに童話集に相当手を加えている。一番気を配ったのは、妊娠や近親相姦など性をほめかす表現を徹底的に削ってしまうことだった。

さて、今日、改めてこれらの童話にスポットライトが当てられ、一種の童話ブームの様相を呈している。童話に対するさまざまな新解釈が試みられているが、なかでも人気があるの

はその「精神分析的」解釈だろう。

例えばブルーノ・ベッテルハイムによれば、「白雪姫」と継母の闘いは父親をめぐる母娘間のエディプスの葛藤だし、カール・ハインツ・マレによれば、「青髭」がこの部屋だけは開けてはならないと言つて妃に渡す鍵は、「貞操帯」の鍵だという。

さらに精神分析的解釈とともに、もう一つ盛んに行なわれているのが、童話の「歴史的解釈」である。例えば童話に継母ママはが多いのも、近世初期のヨーロッパでは夫五人のうち一人が妻を失い再婚したという事情を表しているし、「ヘンゼルとグレーテル」に出てくる「子捨て」も、飢饉で働き口がないときはごく普通に行なわれていたことだというのである。

そこで私たちは、それら学者たちのさまざまな解釈を参考にして、グリム童話「初版」の残酷で荒々しい表現法を残しながら、その奥に隠された深層心理や、隠された意味を徹底的にえぐり出して、もっと生き生きして生々しい『グリム童話』を、自分なりの解釈と表現法で形作つてみた。

時代は厳密ではないが、だいたい十二〜十八世紀あたりの前近代で、舞台はヨーロッパのある王国という辺りに設定してみた。あくまでグリム童話の伝えようとしたもの、あるいは伝えたかったであろうものを大胆にデフォルメしてみたつもりだ。

「へーえ、なんだ。これはこういう意味だったの？」とか、「なるほど、ここの箇所は、実はこういうことを伝えたかったのね！」などと、読者が改めて目を開かされる思いになつて

くだされば、幸せである。

では、『新“グリム童話”』の、残酷にして深遠なる世界を心ゆくまでお楽しみいただけますように……。

桐生 操

本当は恐ろしいグリム童話

CONTENTS

白雪姫❖実母との愛をめぐる闘い 9

シンデレラ❖母が遺した幸せへの約束 51

カエルの王子さま❖女心を変えた不思議な力 95



青髭 ♪ 禁断の鍵はもうひとつ 117

眠り姫 ♪ 王女が眠った本当の理由 149

ネズの木 ♪ おとぎ話はこんなに怖い 195

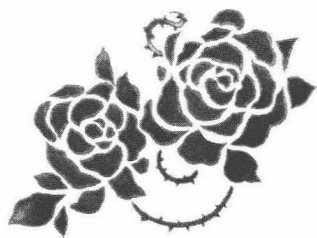
参考文献

220



装幀——こやまたかこ

装画・挿画——弓本純加



意地悪な魔女が、姫の実の母親だったという真実。

王妃は廊下の曲がり角に身をひそめて待つていた。燭台の仄暗い明かりが、長々とつづく廊下をしらじらと照らしている。

そのとき廊下を擦るような忍び足の足音が聞こえ、マントに顔を隠すようにして、一人の大人な男が向こうから歩いてきた。それが他ならぬ王であることを、王妃はすぐにみとめた。

王は周囲をきよろきよろと見渡していたが、誰もいないことを確かめると、ある部屋の前に立ち止まり、扉を押し、室内に吸い込まれるように入ってしまった。王妃は一人、廊下の陰に残された。

どんなことが起こっているのか、部屋の中をのぞいてみたい。だが、それは恐ろしいことだ。許されぬ罪だ。王妃はしばらく自分の中の罪の意識と戦った。しかし焦る思いと好奇心のほう、ついにそれに打ち勝った。

恐ろしい悪魔に魅入られたように、王妃は王が足音を忍ばせて入ってしまったドアに近づくと、

腰をかかめて、鍵穴から室内をのぞきこんだ。

仄かな月明かりに照らされた室内で、ベッドの上に一人の娘が横たわっていた。その上に王がかがみこみ、互いに抱き合つて熱い接吻をかわすさまが見てとれた。娘のまだ幼い顔に幸せそうな笑みが火をともし、半開きになった唇からリスのような愛らしい歯がちらとのぞいた。

王が左腕で娘を抱きながら、右手を娘の寝衣にかけ、するすると脱がせていく。

やがて娘の仄白い裸身が少しずつ現れ、それが月明かりに照らされて、しらじらと浮かびあがる。わずかにふくらみかけた乳房、まだ毛の生えていない丸みのある下腹、そこからくつきりとつづいている、人形のようにのびやかな二本の脚……。

王妃はそれ以上見ていられなくて、鍵穴から身をはなした。それまでの緊張感が解けたのか、絶望感に苛まれたのか、急に全身の力が抜けて、へたへたと床の上に崩折れた。夫の浮氣を目撃した妻の悲嘆……。誰にでも、そう見えたことだろう。しかしここでいつそう悲劇的だったのは、その夫の浮氣の相手が、二人の間の実の娘だったことである……。

雪が降っていた。王妃は黒檀の枠の窓際に腰をおろして、針仕事をしていた。

この国に嫁いでからもう十年。美貌の王妃は高い身分の出ではなかったが、面食いの王にぜひにと望まれて結婚したのだった。

結婚後しばらくは、王は夢中で王妃を愛した。王妃が小姓に目を向けたと言つては嫉妬し、

家臣に親しく話しかけたと言つては嫉妬した。結婚前に熱心に言いよられた貴族のことで、王妃をうるさく問い詰めたこともある。

しかし幸福は、長くはつづかなかつた。その時代の常として、いつも何処かの国との戦いがあり、城の領主はほとんど城を留守にして、遠い戦場に出掛けた。一人城に残される王妃は、孤独だつた。

侍女たちに囲まれて、なすこともなく日々が過ぎる。

人の噂話や悪口、化粧やドレスの話など、女どもの話題はたわいない。そんな輪の中心で、王妃は努めてほがらかに笑つてみせたが、内心は孤独だつた。

そんな王妃の唯一の楽しみは、夜、自分の部屋に一人閉じこもり、嫁ぐときに持ってきた、魔法の鏡を取り出して、それに見入ることだつた。ときおり王妃は、その鏡に向かってこう尋ねた。

「鏡よ、鏡。この世で一番美しいのは誰？」

「それは王妃さま、あなたです。この世で一番美しいのは……」

鏡の返事を聞いて、王妃はほつとした。

豊かな栗色の髪、くつきりした目鼻たち、大理石のような白い肌……。王妃は肌の白さを大切に、お洒落の先進国フランスから輸入された処方に従い、いろんな薬草から作った巴布で、毎朝、肌をマッサージさせていた。しかし時間が経つにつれ、さすがに王妃の美貌にも翳りが見えた。肌がくたびれ、目尻のしわや染みが増え、王との夜の行為にも前ほど熱が入らなく

なる。そんな王妃に、王はしだいに退屈し始めたようだった。

王がある貴族の娘を囲い、それを寵姫にしようとしているという噂も、耳に入ってきた。いつも城を留守にするのは、戦争のためだけではない。その娘のもとをしばしば訪れているというのである。

王は少女好みだった。ここに嫁いできたとき、王妃もまだ十五の若さだった。美女というより、美少女といったほうがふさわしい初々しい美しさに、王は一目惚れしたのである。

豊かな乳房やヒップなどに、王はあまり興味がなかった。すべすべした下腹につづく、少年のようにすらりとした脚、無駄な肉のつかない、きゅつと引き締まったヒップ、細面のくつきりした凍々しげな顔……。王妃のそんな中性的な美しさが、王を魅了したのである。

当時、年端もいかぬ少年少女の結婚は、別に珍しいことではない。十歳そこそこで異国に嫁いだ王女の例も多い。相手の王子のほうもまだ性的なことに未熟で、夫婦の営みを結ぶどころか、一緒に毎日はいやぎまわっていたという話もある。

そういえば、今、王が寵愛している貴族の娘も、十四にもならぬ少女だというではないか。そして王妃のほうには、大きな弱みがあった。結婚十年目というのに、まだ子供がないのである。

王妃はため息をついて、窓の外の雪を見上げた。

そのとき思わず針で指を突いて、血がぼたりと雪の中に落ちた。真っ白な雪を染めた鮮血の紅は、まぶしく目に染みた。眺める王妃の頬にもふっと赤みがさし、それがいつになく王妃を